



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第18主日 B年 (2021年8月1日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 16章2—4、12—15節  
第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4章17、20—24節  
福音朗読：ヨハネによる福音 6章24—35節

## いのちのパン

### 三つの朗読から

第一朗読の神さまの言葉「天からパンを降らせる」(4節)は、ここに銘記したい言葉です。荒れ野では人間は自分の小ささ、惨めさを体験します。照りつける太陽、緑のない褐色の土地、生き物もなく、水もありません。そのような苛酷な環境で人間はいのちについて思い巡らします。いのちを思い巡らすことで、いのちの源である神についても考えます。荒れ地は神と人とは向き合う場所なのです。今日の朗読箇所は、イスラエルの民が食物がないことに不平を述べる場面から始まっています。彼らは、直面している食物の窮乏だけにしか関心がありません。食物の与え主、いのちの与え主である神さまへのまなざしは持ちあわせていません。ただ満たされればよいと考えています。そんな民の気持ちを神さまはよくご存知でしょうが、決して怒ることなく、ウズラとパン(30節ではマナと名づけられます)を与えました。荒れ野は何もないところだからこそ、いのちの与え主である神さまは、ここをこめて人間に対応するのです。

第二朗読では、キリストによってユダヤ人と異邦人との間に隔ての壁を取り壊されたと主張するパウロは、キリストにおいて一つにさせられているのだから、一致の中に生きなさいと勧めています。「古い人を脱ぎ捨てて…新しい人を身に着け」(22、24節)という表現を覚えましょう。毎日、わたしたちは古い人を脱ぎ捨ててるのです。そして新しい人へとさせていただくのです。毎日、わたしたちは新しく創造されているのです。「キリストについて聞いた(21節)わたしたちは、新しい生き方をめざすのです。そのためにミサがあります。

福音朗読は「わたしが命のパンである」というイエスさまのひと言が響きます。群衆とのやりとりが展開していますが、イエスさまの言葉の意図と群衆の理解には隔たりがあるようです。「パン」という日常の単語を思い巡らしましょう。「神のパンは、天から降って来て、世に命を与える」(33節)。イエスさまご自身が「パン」です。それは神の言葉であり、同時にイエスさま自身の肉と血です。しかし、

群衆は単に空腹を満たすためだけの「パン」を考えています。本当の「パン」にありつきたいものです。

## 説教

『ヨハネによる福音書』の6章はイエスさまがどなたであったか、そしてどのような使命を生きられるのかというテーマが展開します。「五千人に食べ物を与えるしるし」(1-15節)、「湖を歩くしるし」(16-21節)が示された後に、イエスさまと、イエスさまを追いかけて来た群衆とのやりとりが始まります。そこでイエスさまは、ご自分が「命のパンである」(35節)とハッキリ言われます。しかし、群衆はイエスさまの言葉がわかりません。そしていつの間にか「イエスのことでつぶやき始め」ます(41節)。とうとう、お弟子さんたちの中からも「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」(60節)と離脱者が生まれます。

ところで、今日の福音には「しるし」という単語が二回登場します。26節と30節です。「しるし」はギリシア語で「セーメイオン」と言いますが、「目印や合図」の意味があります。飼葉桶に横たわる幼子は救い主の「しるし」でした(ルカ2章12節)。その幼子は反対を受ける「しるし」と定められていました(ルカ2章34節)。ですから、イエスさまご自身が「しるし」となります。この「しるし」を受け入れ、この「しるし」に身を託し、この「しるし」に従う人こそが「神の子」となる恵みをいただくのです。

また、「しるし」、すなわち「セーメイオン」には「不思議な出来事、奇跡」の意味も含まれています。『ヨハネによる福音書』では、奇跡を表す一般的な単語「デュナミス」を用いずに、「セーメイオン」、「しるし」を用いています。イエスさまは、「奇跡」、「デュナミス」をおこなって救いの実現、神の国の到来を示します。そのことを受け取るためにはイエスさまを信じるころ、イエスさまに頼る態度がなければいけません。つまり、「デュナミス」は信仰を前提とする奇跡です。「セーメイオン」はイエスさまが御自分がどなたであることを示し、それを人々に認めさせるためにおこなうわざです。ですから『ヨハネによる福音書』では、イエスさまは人々に頼まれて、せがまれて「しるし」・「セーメイオン」を行います。例えばカナの婚礼で水をぶどう酒に変えた「しるし」も、マリアさまに頼まれてのことでした。『ヨハネによる福音書』でのイエスさまは「しるし」を行いながら、御自分が神の子であることを人々に示そうとなさるのです。

今日の福音に登場する「しるし」は興味深いです。群衆がイエスさまのもとに押し寄せたのはパンを食べて満腹したからであって、「しるし」を見たからではありません(26節)。それでいて、群衆はイエスを信じるためにどんなしるしを行ってくれるのかと問いたします(30節)。群衆はパンという「しるし」を見落としているのです。そればかりか、さらなる別の「しるし」を求めています。対話が進めば進むほど、イエスさまと群衆の距離は離れていきます。

第一朗読で、主なる神は人々の不平を聞いてパンとウズラを与えます。それはモーセが神と人々との間を仲介しているからです。「わたしが命のパンである」と今日の福音朗読の最後に記されています。「しるし」そのものであるイエスさまをいただいて、口にして、わたしたちは生きていくのです。